**自然と歩む。**

**化女沼のラムサール条約登録から10年、**

**その歴史とこれからを考えます。**

　水鳥の聖地「化女沼」には、稀少な植物や生きものがたくさん暮らしています。この豊かな自然を守り、人と共生するために、保全活動や環境教育を行う人や、動き出しているプロジェクトがあります。　市民の憩いの場所でもある化女沼について、さまざまな動植物と今後を探りました。

**化女沼の概要**

▲ラムサール条約の登録面積：34ha（湖面部分）

▲生物相：鳥類120種以上、植物650種以上

特にガン・カモ類の越冬数が非常に多く、ピーク時は約4万羽がねぐらとして利用

▲ラムサール条約登録年月日：平成20年10月30日

**化女沼の歴史**

　古川地域の北西に位置する化女沼は、丘陵地と平野部が出会うところにあります。ここは、県北部や秋田県・山形県から流れる迫川や江合川などで形成されている低湿地帯です。

　化女沼は、昔からかんがい用ため池として維持され、古川地域や田尻地域の水田に用水を供給してきました。

　現在の化女沼は、治水ダム湖として、約300年前につくられた農業用ため池と自然の沼を造成し、平成7年に完成しました。雨水と湧水、洪水時の導水を貯水することで、農業用水の確保と洪水調節の役割を担っています。

**多様な植物たち**

　夏には、ハスやヒシを中心とした水生植物が沼の広い範囲に咲き、沼の周辺には、ニッコウキスゲやノハナショウブなどの花が咲きます。中には、国内ではほとんど見ることができなくなった稀少種も多く見られ、化女沼やその周辺には、およそ650種類を超える植物が確認されています。昆虫類も多く、特にトンボ類の宝庫で、チョウトンボなどたくさんの種類を見ることができます。

**水鳥の聖地として**

　水鳥の生態系にとって、たくさんの種類の植物や昆虫は、命をつなぐとても重要なものです。

　このような自然環境に支えられて、化女沼には、マガン、ヒシクイ、オオハクチョウなどのガンカモ類が、越冬のため毎年4万羽超も訪れます。これまでに、120種を超える鳥類が確認されてきました。

　マガンやヒシクイは、越冬のためにロシアから、約2～4千キロの旅をしてやってきます。現在では、マガン・稀少なヒシクイの重要な越冬地となっています。マガンは日本へ飛来する群れのほぼ全数が、化女沼や蕪栗沼・周辺水田（田尻地域）、伊豆沼・内沼（栗原市・登米市）などで越冬するといわれています。

　化女沼にはヒシクイが多く、蕪栗沼・周辺水田にはマガンが多く飛来しています。マガンは年間20万羽ほど国内に飛来するのに比べ、ヒシクイは、わずか数千羽ほどしか飛来しません。また、飛来地もマガンに比べると非常に数少ない野鳥です。そのヒシクイが化女沼で越冬することは、地域や市が誇れることのひとつです。

**化女沼の世界的価値**

　そうした渡り鳥が選んだ聖地であることが評価され、平成20年10月、化女沼はラムサール条約湿地に登録されました。

　ラムサール条約は、水鳥の生息地として重要な湿地の「保全・再生」「ワイズユース（賢明な利用）」「交流・学習」を目的とした国際的な条約です。昭和55年、北海道釧路湿原が、日本で初めてラムサール条約に登録され、現在までに52カ所（平成30年12月現在）が登録されています。

　国内には、湿原や湖沼、藻場、干潟、マングローブ林、サンゴ礁、地下水系などの登録地があり、世界的にも湿地生態系の多様性が評価されています。県内では、化女沼や蕪栗沼・周辺水田（平成17年登録）、伊豆沼・内沼（昭和60年登録）のほか、平成30年10月には南三陸町の志津川湾が登録されました。

**自然と人の共生を探る**

　化女沼は市街地や東北自動車道からのアクセスが良く、国指定史跡宮沢遺跡にちなんだ古代の里公園もあることから、多くの人にとって身近な存在です。遠足やレジャーなど、個人・団体問わずさまざまな利用ができます。

　化女沼がラムサール条約に登録されて10年。大崎に暮らすわたしたちには、化女沼の湿地生態系を維持すること、そして、それらがもたらす恵みを持続的に活用していく使命があるのではないでしょうか。「豊かな自然」とは、古くから自然に良い形で人が手を加え、自然と共生する文化が根付いてきたからこそ、実現したものです。

　化女沼を豊かにする動植物や保全活動に取り組む人々、この環境だからこそできる子どもたちの環境教育、わたしたちができることに目を向けてみませんか。

　50年先、100年先も、自然と人が共生し続けるために。

**湿地・里山再生プロジェクト**

　市では、子どもも大人も関係なく、市民誰もが化女沼の自然環境を身近に感じ、学ぶことができる環境づくり「湿地・里山再生プロジェクト」を、市民参加型で進めています。

　化女沼周辺でみられる多様な植物群落の再生、在来の水生生物に安全に触れられる場所の再生、里山林から稚樹やドングリを採取し、3600本の広葉樹の植樹などで、里山の雑木林を再生するプロジェクトです。

　現在までに、敷地内にビオトープ（生物が暮らす空間）池3つ、水路の設置、化女沼由来の草本植物の植栽、遊歩道への木質チップ敷きこみなどが、ボランティアや小・中学生などの市民参加型で行われてきました。

　化女沼の南西部、古代の里公園の向かい側の敷地約4ヘクタールに、多くの市民が湿地や里山の環境を体験できる場所を整備し、人も生きものも居心地の良い環境づくりを目指しています。

**平成27年頃**

写真：自由広場は草がうっそうと生い茂っていました。

写真：遊歩道に木質チップ敷きこみ作業を行う小学生。

**平成30年12月現在**

写真：平成28年から始まった植樹作業や遊歩道の整備によって、自由広場の活用幅が期待されています。：

写真：多くの市民の皆さんの手により、化女沼の湿地・里山の再生が進んでいます。

**化女沼の生きものたち**

**マガン**

ふつふつ共和国観光大使パタ崎さんのモデルでもある「市の鳥」。化女沼には最大で約2万羽が飛来します。

**亜種ヒシクイ**

マガンよりも一回り大きなガン類の仲間。近年、飛来数が減少していることも課題の一つです。

**オオムラサキ**

里山・雑木林に住む代表的な昆虫。羽が紫色に輝く大型のチョウで、7月・8月に沼岸に生えるヤナギなどの樹液に集まる。

**チョウトンボ**

幅広い「はね」を持ち、チョウのようにひらひらと飛ぶトンボ。化女沼自由広場でも多く見られます。

**化女沼の稀少な植物**

**ノハナショウブ**

化女沼に自生するノハナショウブ。アヤメより1カ月ほど早く花が咲きます。

**キキョウ**

絶滅危惧種のキキョウ。化女沼では、数株のみ自生。種子で増やしています。

**ニッコウキスゲ**

5～6月、群生して黄色の見事な花が咲く禅庭花（ニッコウキスゲ）。

**リンドウ**

以前は化女沼で頻繁に見られたリンドウ。現在の自生は数株のみ。

**化女沼の自然に子どもたちの「未来の種」があります**

　特定非営利活動法人エコパル化女沼は、化女沼の環境保全や子どもたちの環境教育、市が進める自由広場（環境教育ゾーン）の整備にも携わっていただき、化女沼の自然環境を守り、継承活動を行う第一人者です。ラムサール条約への登録10周年を節目として、エコパル化女沼 木村敏彦理事長と、野生植物研究所所長で宮城誠真短期大学講師の髙橋和吉副理事長にお話を聞きました。

写真：エコパル化女沼理事長の木村さん（左）と髙橋さん（右）

　「化女沼がラムサール条約に登録された翌年平成21年から、エコパル化女沼の活動が始まりました。子どもたちに沼を知り、将来もずっと沼に親しんでもらうため、自然を体験する『里地・里山探検隊』という環境教育を行っています」と木村理事長が活動概要を話します。野草・山菜の採取や外来魚撲滅大作戦、ホタルの観察、マガンのねぐら入り観察会など、年間を通して9回のプログラムで活動しているそうです。

　「子どもたちは、動植物に興味関心があっても、その生態まで良く知らない子が多い。それでも、実際に触って匂いを嗅いだり、目で違いを比較したりすると、はっと驚き、何かに気づく瞬間があります。その感動があると、物事への観察力や関心が変わってくる。何事にもその体感がとても大事で、豊かな感受性を育み、子どもたちの『未来の種』になると思います。化女沼の動植物がいかに貴重なものか、ということも、体験してこそ実感がわき、目には見えない大切なものを見つけるのです」と髙橋副理事長は、環境教育の重要性をときます。

　現在、市が整備を進めている自由広場（環境教育ゾーン）は、化女沼やその周辺に昔から自生していた植物・樹木の移植や、絶滅危惧種を種子から育てることにこだわり、化女沼本来の植物が集まった広場を目指しています。広場の整備は、市が募集したボランティアや企業、環境教育で自然を学んだ子どもたちが行っています。

　木村理事長は「種から大切に育てた植物たちが、大きな花を咲かせるにはまだ時間がかかりますが、関わったボランティアや子どもたちにとって、とても貴重な体験で、今後が楽しみではないでしょうか。」と話します。

　また、「化女沼には外来魚がまだまだたくさんいる。年に数回、定置網の設置や電気ショックなどを与えて除去作戦を行い、約8年継続して、やっと一昨年頃からエビやフナが見えるようになってきました。沼の環境が良くなると、もともと700種以上確認されていた化女沼の植物も豊かになり、昆虫や水鳥も増えることでしょう」と今後の課題を話します。

　最後に、「自由広場が完成すると、県内や国内でも珍しい、本来自生する植物が集まった広場となります。散歩、サイクリング、公園でのピクニックなど、化女沼を訪れた人が自由広場に立ち寄って、1年を通じて花が見られる環境にしたいですね。その整備に、自分が関わったんだと胸を張ってくれる人たちがいることは、私たちにとっても誇りです」と髙橋副理事長が期待を話してくれました。

※エコパル化女沼は、環境教育や保全活動の取り組みが評価され、総務省が主催する平成29年「ふるさとづくり大賞（総務大臣賞）」を受賞しました。

**自然が育む　きらっと輝く五感の芽**

　化女沼にとどまらず、大崎耕土全体をフィールドととらえ、子どもたちが自然を五感で感じ、学ぶ活動を支援している団体が「大崎自然界部」です。保育園児から大学生まで幅広い世代に環境教育を行っている大崎自然界部 部長の若見朝子さんに聞きました。

　「活動のきっかけは、自分の子どもと大崎の自然でたくさん遊びたい！と思ったことでした」

　若見さんが大崎自然界部を立ち上げたのは、今から10年前。農業体験がきっかけで、農業や自然の魅力に引かれたそうです。

　「同時期、子どもたちがいつでも自然に触れられる現場がほしいと思い、市内の小学校の協力を得て、教育現場に田んぼやビオトープを造っていただきました」。若見さんは、その場を利用し総合的な学習の授業をするようになったそうです。

　「環境教育では、蕪栗沼や化女沼へ実際に出かけ、四季折々の季節の風を肌で感じ、草原を駆け抜ける香りや音、鳥のささやきや営みなど、五感で感じる授業を意識してきました」。現在では、全国各地からあらゆる分野の大学教授や専門家を呼んで、授業をしているそうです。

　また、「興味を持った一つのことに対して探究することは、とても大切なことです。子どもたちが『雑草』と思っている草にも、きちんと名前とその由来があり、花が咲く季節が違えば、特徴も違います。植物や生きものには、輝く命が宿っていること、みんな違ってすばらしい命が何層にも重なりあって輝きだすことに気づけます」と話します。

　「土の温かさや冷たさ、日々変わる風の音、一人一人の子どもの感覚で、自然の中に新しい気づきがあります。その気づきがあった、子どもたちの瞳がキラッと輝く。それこそ大事にしていきたいもの。大人の固定観念や正解はありません。大崎には、子どもの瞳を輝かせる土台、フィールドとなる自然がたくさんあるのです」

　最後に、「大崎耕土だからできる自然教育です。子どもが興味を持って一つ一つ掘り下げた学びは、ふるさと教育にもつながります。もっともっと大崎を体感して、愛着を持ってもらいたいですね」と、若見さんは、大崎で自然教育ができることの素晴らしさ、将来への希望を話してくれました。

写真：環境教育の一環で、自由広場の通路に木質チップを敷き詰める保育園児と大学生

写真：生きもの調査で授業を行う若見さん（右）

世界農業遺産認定記念

化女沼ラムサール条約登録10周年記念

大崎市ラムサールフェスティバル

さまざまなワークショップやシンポジウムなどで、化女沼の魅力を体験してみませんか。

日時　1月19日土曜日　10時～16時

場所　大崎生涯学習センター（パレットおおさき）

化女沼ラムサール条約登録10周年記念事業実行委員会事務局 電話23-2281 ファクス23-7578

※参加方法など、詳しくはお問い合わせください。